

1 外国語科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策

英語力の向上は教育界のみならず、産業界など様々な分野に共通する重要課題である。生徒に求められる英語力は、相手の意図や考えを的確に理解し、論理的に説明したり、反論・説得したりできる能力である。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度も求められる。こうした能力を育成するためには、新学習指導要領を推進することが基本となる。また、平成23～28年度までの5か年計画で、次の5つの提言を実行していく。

提言1 生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する。

- ・ 外部検定試験を活用し生徒に求められる英語力の達成状況を把握・検証。英検であれば、中学校卒業段階で3級、高等学校卒業段階で準2～2級程度。
- ・ 学校は、学習到達目標をCAN-DOリストの形で設定・公表し、到達状況を把握。文科省は、今年度中にCAN-DOリスト作成の手引きを作成予定。

提言2 生徒にグローバル社会における英語の必要性について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図る。

- ・ 国は英語を使って活躍する人々を紹介するDVDを作成し配布。

提言3 ALT、ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす。

- ・ 英語教育情報を掲載した「えいごネット」開設。

<http://www.eigo-net.jp/> (財団法人英語教育協会 文部科学省協力)

提言4 英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育改善を図る。

- ・ 各試験団体により一定期間において英語教員を対象とした受験料割引制度を提供。
※少なくとも求められる英語力は英検であれば準1級、TOEICであれば730点。
- ・ 教育委員会は、地域の戦略的な英語教育改善のための拠点校を形成。

提言5 グローバル社会に対応した大学入試となるよう改善を図る。

- ・ 国は、4技能を総合的に問う入試問題の開発・実施を促進。

※ 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言」の詳細 (文部科学省)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm

(2) 授業時数増を効果的に活用し、授業の改善充実を図ることについて

各単元にバランスよく時数を配当し、言語活動を充実させ、言語を実際に活用させることを通して表現力を育成するとともに、言語材料の定着を図る。生徒に求められる英語力を育成するためには、例えばスピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション等を取り入れた生徒の言語活動を中心とした授業を展開する必要がある。言語活動の充実のために公表されている資料等は次のとおりである。

※ 平成22年度各学校配布の「授業実践事例映像資料」

- ・ 小中の接続、中高の交流等をテーマにした実践事例映像資料2が配布予定。

※ 言語活動の充実に関する指導事例集 外国語 (文部科学省)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1306161.htm

※ 仙台市スタンダード・カリキュラム中学校外国語 (仙台市教育センター)

http://www.sendai-c.ed.jp/senkari/ch_dl/index.php?m=dp&n=ch_curriculum9

(3) 学習評価の工夫改善を図ることについて

単元の指導を見通す際、単元を終える段階で生徒に身に付いているべき能力を見定め、それを単元の目標に設定する。その際、「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」を中心に具体的に設定する。その単元の目標がそのまま単元の評価規準となる。

毎時間の授業ではねらいを絞り込み、ねらいに対応した評価規準で評価を行う。生徒指導要録等に関わる総括的評価は、十分に指導し練習させ、定着が図られた段階で行う。評価の工夫改善を図るために公表されている資料は次のとおりである。

※ 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所）

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/chuu/10_chu_gaikokugo.pdf

3 「特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）調査結果」に関するポイントや留意事項

(1) 調査の内容

本調査は国立教育政策研究所が行った「書くこと」に関する調査である。平成 22 年 11 月に全国から無作為に抽出された 101 校の中学生第 3 学年約 3,300 人を対象に行った。

(2) 結果のポイント

① 「書くこと」の基礎的・基本的な知識・技能

疑問文や否定文の形式について理解している生徒の割合に比べ、コミュニケーションの中でそれらの文形式を正しく使うことができる生徒の割合が低い。

② まとまりのある文章を書くこと

平成 15 年度の調査との比較から、まとまった内容の文章を書くことができる生徒の割合が増加した。また、無解答の割合が減少した。

(3) 今後の指導の改善方向

実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を通して定着を図っていく。そのためには、英語で書く機会（活動）をたくさん設定することが大切である。生徒に「書きたい」気持ちを起こさせる導入をし、よいモデルを提示し、生徒が思考・判断する課題を与え、書いたものを次の活動に生かすなどの授業展開を工夫をする。

※ 本調査の詳細（国立教育政策研究所）

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_eigo_2/tyousakekka.pdf

4 小学校→中学校→高等学校→生涯学習

